

# 後撰集「題しらず」「よみ人しらず」をめぐって

福田 孝

後撰集の本文は乱れていることで有名であり、乱れ方は尋常でない。歌数・歌序<sup>①</sup>・作者名・歌本文等々、諸本間で大きな差がある。本論では、その事由の一端の解明をめざして、古来問題にされてきた「題しらず よみ人しらず」の書式・記載について現存諸本を整理し、そのうち「よみ人しらず」に主に言及して世に出た後撰集の作者名表記部分が元来どのようなようになっていたかの遡及を試みる。

諸本についてまず述べておく<sup>②</sup>。本稿で用いるのは、前半十巻もしくは全二十巻が伝来している諸本である（切等については必要に応じて触れる）。現在、後撰集の諸本は杉谷寿郎によって次の四系統に整理されている。汎清輔本系統、古本系統、承保三年奥書本系統、定家本系統である。汎清輔本系統は二荒山本・片仮名本・承安三年本を、古本系統は堀河本・雲州本・伝坊門局本を、承保三年本系統は天理図書館本を用いる。汎清輔本系統のうち二荒山本・片仮名本とは巻一〜十までの伝来である。承安三年本と称される清輔本の本文は定家本（承久三年本）に朱で書き入れたものがそれであるが、全歌に施されているわけではない。杉谷の計上によると二〇三七首への朱の書き入れがある（前後に朱があれば歌数として計上されているの

で、朱の書き入れ歌は実際にはこれより減る）。そして、片仮名本と承安三年本とは清輔校訂本と見られるのだが、二荒山本は別の伝来であるものの清輔本に近い本文を有するゆえに同一系統に分類され、よって「汎」が冠せられている。また、堀河本は巻一〜巻十四まで（堀河本の本来本文といえる）と、巻十五〜巻十七四番歌あたりまで（承保三年本系統の本文）と、巻十七四番歌あたり〜巻二十最終四番歌まで（定家本系の本文）とからなる混態本である。承保三年本は巻一〜巻十四四番歌あたり〜巻二十最終四番歌まで（承保三年本の本来本文といえる）とからなる混態本である。以上が非定家本系統についてである。現存する写本の大半を占める定家本系統においては、流布本である天福本とそこにいたる過程をみるため無年号A類本・無年号B類本を用いる。

## 一

作歌事情（Ⅱ詞書内容）・作者名ともに知られないさいの、後撰集諸本での書式の相違は次のようである。

題不知 読人不知

みなその色さへふかきまつがえに千とせをかねてさける  
藤なみ(雲)

題不知 よみ人も

みなその色さへふかきまつかえにちとせをかねてさける  
ふちなみ(保)

題読人不知

ミナソコノイロサヘナカキマツカエニチトセヲカケテサケ  
ルフチナミ(片) 卷三春下104

古今集が「題しらす よみ人しらす」という定まった同一書式になつてゐるのに対して、後撰集では以上のように本によつて「題しらす よみ人しらす」「題しらす よみ人も」「題よみ人しらす」と混乱がある(以下、濁点は写本の実際に従つて付さない、また「題読人不知」「題よみ人しらす」の表記は同一とみる)。

古来この書式の混乱は問題視されてきており、清輔・俊成・定家の言及がある。

或人云、「古今」ニハ「題不知 読人不知」、「後撰」ニハ「題不知 読人も」、「拾遺」ニ「題読人不知」、如此書之。然而末代本不必分別。是転々書写之失歟。

まことや、いづれの頃より誰か言ひ初めける事にか、  
(清輔「袋草子」)

「後撰」には「題知らす 詠み人も」と書き「拾遺」には「題詠み人知らす」と書くなり」と近き世の故人など申すと聞きて、その上にはさやうにも書きはべりしを、なほ古き本どもあまた尋ね見はべりしかばさまざまに書きたる

様ただ女などの書き写す程にさやうなる事を人の申し出でたるにこそと見えはべれば、故後白川院の「三代集書きてまゐらせよ」と仰せられし時「後撰」をも「拾遺抄」をもみな「古今」の同じ事に書きて奉りはべりにしなり」  
(俊成「古来風躰抄」)

世間久云伝之説

題しらす よみ人しらす 古今如此

題しらす よみ人も 後撰

題よみ人しらす 拾遺抄如此

亡父命云此説不定事也被書進 院之本皆如今古被書  
今見此本果而如古今 如此事只後人之所称歟」  
(定家、天福本奥書)

定家の奥書が「古来風躰抄」に拠つてゐることは明白であり、「古来風躰抄」の記述も「近き世の故人など申す」と書かれてゐるところからは「袋草子」を承けてゐると推される。定家の奥書中の「此本」とは天福本に朱で書き入れられた伝行成筆本のことである。これら言及から分かることは、当時後撰集では「題しらす よみ人も」となつてゐるのが定式である説がなされてゐたこと・実際の後撰集の本文はそうした説とは異なりひどく乱れてゐたこと・その乱れは後世の書写者の所為によつて生じたと見られてゐたこと・俊成は「古今集」に倣つて「題しらす よみ人しらす」に書き揃へ、定家は伝行成筆本が古今集の書式と同じになつてゐることを確認したこと、である。

現存諸写本に見える様相を確認するためにまとめたものが表1である。同一系統でも書式が異なるものがあること、そして



同じ写本の中で書式が混在しているものがあることも分かる。

汎清輔本系統では、二荒山本は「題よみ人しらす」で揃い、承安三年本は「題しらす よみ人も」で揃う。が、片仮名本は「題しらす よみ人しらす」と「題よみ人しらす」の混在である。同じく清輔校訂本である伝慈円本(巻七・八のみ現存)も片仮名本同様「題しらす よみ人しらす」と「題よみ人しらす」の混在本である。清輔が接していた本は「題しらす よみ人しらす」「題よみ人しらす」の混在本であったようである(ただ片仮名本と伝慈円本とは383・424・456で差があり、まったく同じではない)。

古本系統では、雲州本は「題しらす よみ人しらす」で揃い(巻十一706のみ例外)、伝坊門局本は「題しらす よみ人も」で揃う(巻十九130のみ例外)。堀河本は巻十七の途中以降の定家本に近い部分では「題しらす よみ人も」で揃うが(巻十九130のみ例外)、巻一から巻十四までの本来本文部分では「題しらす よみ人しらす」「題しらす よみ人も」の混在である。白川切は「たいしらす 人不知」「たいよみ人しらす」の混在である。

承保三年本系統は「題しらす よみ人も」で揃っている(巻十七170のみ例外―承保三年本の本来本文部分)。

定家本系統では、無年号A類本が「題しらす よみ人しらす」で揃い、無年号B類本・天福本が「題しらす よみ人も」で揃っている。

定家本系統で揃っているのはこの書式への俊成の関心が引き継がれたものであり、『後撰』をも『拾遺抄』をもみな「古

今」の同じ事に書きて奉りはべりにしなり」の言によると俊成から定家に受け継がれた家本が「題しらす よみ人しらす」となっていた可能性が高い。定家本は無年号A類本↓無年号B類本↓天福本と推移したと考えられており、無年号B類本の時に「題しらす よみ人も」書式に移行したようである。天福本には「よみ人も」の「も」に伝行成筆本による朱の書き入れ「しらす」が多く、多くの箇所であり(後述)、定家はこの書き入れに准じて最終的に嘉禎本で「題しらす よみ人しらす」に揃えたと見られている<sup>①②</sup>。

定家本が揃った書式になっているのと軌を一にすると見えるのが清輔本である。写本においても、片仮名本に「読人不知イ」310、「題読人不知 或本无此詞」424の注記二箇所が、伝慈円本に十三箇所中十一箇所に同様な異本注記が見え、清輔がこの書式に強い関心を抱いていたことが知られる。片仮名本や伝慈円本は清輔四十歳代の校訂本と推測され、承安三年1193本は七十歳の折の校訂本と考えられている<sup>③</sup>。「袋草子」上下巻の根幹部分の成立は保元二年1107から三年1108と見られている。「転々書写之失」を訂する意図により晩年の承安三年本で「題しらす よみ人も」に揃えたと見られる<sup>④</sup>。

以上を要すると、(1)清輔は片仮名本や伝慈円本のような混在する本に接し、それを「末代本不分別」と称して承安三年本に至って揃えることにしたこと(二荒山本も或る時点で「題よみ人しらす」に揃えられたと推測される(後述))、(2)俊成も「さまざまに書きたる様」と称しているということは乱れた書式の本文に接することがありそれを古今集の書式に揃えたと

見ること、(3)定家本では当該検討箇所に関わって全箇所を或判断をもつて二回書き換えていること、となる。これらからすると、古本系本文においても、白川切・堀河本のような混在する書式本文が雲州本・伝坊門局本のような揃った書式本文に先行する、すなわち、混在状態が先にあり、それが伝来途上できれいに揃えられたと見てよいであろう。「転々書写之失」「ただ女などの書き写す程に」からは清輔も俊成も世に出たもともとの後撰集はこの書式について統一のとれた揃った状態を持っていたにも関わらず伝来途上の書写者によって書式の混乱が生じたと理解していたと解しうるが、しかしよほど恣意的に改変を加えない限りこうした書式の混在状態が書写のさいに生じることは考え難いからである。

また、書式の混在する写本を見ると、片仮名本・伝慈円本は「題しらす よみ人しらす」「題よみ人しらす」の混在、堀河本は「題しらす よみ人しらす」「題しらす よみ人も」の混在、白川切は「たいしらす 人不知」「たいよみ人しらす」の混在である。白川切は堀河本と同じ古本系統に属するが、当該箇所においては汎清輔本系統の片仮名本・伝慈円本に似る混在である。混在の様相についても異なるし、他にも、いずれかがどこかに偏在するとか、諸本間で位置において共通性があるといった傾向も見出すことができず、当該書式の混在状況からは諸本間の関係性に言及することもできそうにない。

こうした「題しらす よみ人しらす」の書式の様相は欠落に関わる事象を加えると、もっと違った様相を呈してくる。例えば、先掲の14番歌は堀河本では

たいしらす

みなその色さへふかき松かえにちとせをかけてさける藤  
なみ

となっている。堀河本でも前歌123作者名は「遍昭」であり、「よみ人しらす」が欠落しているとおぼしい。片仮名本424番歌「題詠人不知」の注記に「或本无此詞」、慈円本462番歌「たいよみ人しらす」の注記に「或本無詠人不知字」、承安三年本131番歌「よみ人も」の注記に「或本無」があり、清輔のころに他にも同様な欠落があったことが知られる。清輔の「末代本不必然」とはこうした欠落も含めて混在した書式存在を表示しているのだろうと推測される。こうした欠落箇所を加えて改めて表2を掲出した。諸本のいずれかが欠落箇所を持つのは六十八箇所中三十三箇所、少なくない。

二荒山本と片仮名本に大きな傾向は見られない。承安三年本・雲州本では後半巻十二以降に確認できる。堀河本では巻十七途中(非定家本の本文を持つ部分)までに見られる現象である。伝坊門局本では354番歌のみに見られる。承保三年本では本来の本文部分(巻十四廻番歌以降)にこの現象が出ている。定家本系統の三本にこの欠落現象は存在しておらず、おそらくは後世的に丁寧に補いがなされた本文だからなのである。

伝慈円本でも354・460が「題しらす」欠、424が「題しらす」と「よみ人しらす」とが欠である。白川切では「よみ人しらす」が欠落している歌として532が指摘でき、前歌がなく断言できない可能性がある歌として131・204がある。

二荒山本の欠落箇所は他本と多く重なる。伝坊門局本で唯一の欠落箇所である354(二・片・慈・坊)を始めとして204(二・白)、339(二・片・堀)、424(二・慈)、460(二・片・慈)、以上が他本と共通して欠落現象を持つ歌である。片仮名本に注記のあった424は伝慈円本でも欠落している。片仮名本では四例中三例をすでに掲出したことになるが、残る一例は131(片・堀・白)である(ここは二荒山本が歌を欠いている)。二荒山本は清輔校訂本である片仮名本や伝慈円本とは直接には接触していない本文であるのに欠落箇所が重なるということ(339・354・424・460)は各本で個別に発生した欠落現象ではなく汎清輔本にほぼ共通すると言え、そうした箇所が承安三年本ではすべて「題しらす よみ人しらす」となっているということはやはり承安三年本は当該箇所については意識的に手を入れたと解するのが妥当であろう(ただし巻十一以降については必ずしもこのことが妥当しない)。また欠落は二荒山本以前から存在したのである。②③ というのも二荒山本は「題よみ人しらす」と一語化した書式で揃えてある。一語化したのちは意識的な書き換えが行なわれない限り「題しらす」だけが欠落すること(197・339・456・460・556)にはならないであろう。欠落は「題よみ人しらす」で揃えられるまゝに生じていたと見える(前節で二荒山本が或る時点で「題よみ人しらす」に揃えられたと述べた理由で

ある)。これは片仮名本・伝慈円本についても言える。

堀河本での欠落現象は巻一から巻十までの前半では他本と共通することが少ない。131(片・堀・白)・339(二・片・堀)のみである。しかし、承安三年本や雲州本に欠落現象が見られ始める巻十一以降では822(安・堀・保)・918(堀・雲)・1064(堀・雲)・1199(堀・保)と共通する欠落が見られる。これら後半の欠落からすると、堀河本の前半での欠落現象も単純に誤脱とは言い切れない。承保三年本については、巻十七以降の本来本文部分(後撰伝本中、最も古い年紀に係する)にこの現象が出ており、古い由来を持つ現象であることが分かる。

同一箇所では二本以上で欠落しているとき「題しらす」が落ちている本もあれば「よみ人しらす」が落ちている本もあるといったことがあってよさそうであるのに、「題しらす」のみか(339・460・822・918・1199・1217)、「よみ人しらす」のみか(131・1210)、ともに落ちるかそれに伴って「題しらす」「よみ人しらす」のいずれか一方が揃って欠落するか(204・354・1064・1320)、であるため、これらの欠落は単なる誤脱ではなさそうである。

また、表2には天福本内にある伝行成筆本による朱の書き入れについても加えた。格別な関心が抱かれていたにも関わらず、「題しらす よみ人も」四十七箇所すべてに「しらす」の朱の書き入れがあるわけではない。十三箇所(約三割弱)に朱の書き入れがない。これまで見てきた様相からすると、朱の書き入れがないところは伝行成筆本で「題しらす よみ人しらす」となっていないなかった可能性が示唆されるようにも思われる。④





表3

巻一 《該当ナシ》	巻二 55 詠人不知	巻三 74 詠人不知	巻四 87 詠人不知	巻五 90 詠人不知	巻六 118 詠人不知	巻七 182 詠人不知	巻八 197 詠人不知	巻九 204 詠人不知	巻十 251 詠人不知	巻十一 270 詠人不知	巻十二 310 詠人不知	巻十三 339 詠人不知	巻十四 354 詠人不知	巻十五 360 詠人不知	巻十六 424 題詠人不知	巻十七 428 詠人不知	巻十八 460 詠人不知	巻十九 464 詠人不知	巻二十 516 詠人不知	巻二十一 556 詠人不知	巻二十二 588 詠人不知	巻二十三 647 詠人不知	巻二十四 654 詠人不知	巻二十五 673 詠人不知	巻二十六 680 詠人不知
	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀
巻十一 《該当ナシ》	巻十二 822 詠人不知	巻十三 884 詠人不知	巻十四 925 詠人不知	巻十五 988 詠人不知	巻十六 918 詠人不知	巻十七 990 詠人不知	巻十八 970 詠人不知	巻十九 1019 詠人不知	巻二十 1060 詠人不知	巻二十一 1191 詠人不知	巻二十二 6 詠人不知	巻二十三 1199 詠人不知	巻二十四 1217 詠人不知	巻二十五 1232 詠人不知	巻二十六 1238 詠人不知	巻二十七 1247 詠人不知	巻二十八 《該当ナシ》	巻二十九 1260 題詠人不知	巻三十 1340 詠人不知	巻三十一 1392 詠人不知	巻三十二 1364 詠人不知	巻三十三 《該当ナシ》	巻三十四 2 《該当ナシ》		
	安	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀
	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀	堀
	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A

- ・「題しらす」が欠落していると考えられる該当歌を掲出し、欠落している写本の略号を記した。
- ・巻数左下の数字は天に「題しらす」の記載がある歌の数。歌番号上の\*は天に「題しらす」の記載があるもの。
- ・「詠人不知」はその記載があるもの、前方の歌に「詠人不知」があり歌序から「よみ人しらす」になるもの。

## 三

作歌事情（詞書）・作者名がともに知られないさいの、後撰集諸本での書式の相違を見てきた。次に、これに関係すると考えられる「題しらす」のみ、「よみ人しらす」のみの欠落を含めて見ていきたい。

「題しらす」のみの欠落も多く見られる。表3にまとめた（前節「題しらす 人しらす」欠落箇所も含めて表は作成してある）。全百四十九箇所中一本でも欠落しているのは四十七箇所、二本以上が欠落であるのは十九箇所であり、少なくない。

二荒山本は欠落が十七箇所ある。片仮名本四箇所の欠落は二荒山本とすべて共通する。承安三年本十箇所もすべていづれかの他本と共通するところがあり、うち三箇所が二荒山本と共通している。以上、単なる誤脱と見えない。また堀河本も巻十四までの本来本文部分に欠落箇所が多く二十一箇所、うち十一箇所が他本と共通するところがある。雲州本では前半には無く巻十以降に欠落九箇所があり、うち七箇所が他本と共通するところがある。承保三年本も巻十四嗣蕃歌以降の本来本文部分に欠落七箇所、うち五箇所が他本と共通するところがある。いづれもやはり単純な誤脱とは見えない。

そして「よみ人しらす」を単独で見た場合の欠落について確認してみる。表4である（前節の該当箇所部分の「よみ人しらす」の欠落箇所も含めて表は作成してある）。

「よみ人しらす」とあるのが妥当な箇所は天福本の記載に基づきつつ天福本で落ちていると考えられる箇所も合わせすべて





て六箇所はすべて他本と共通するものである。

この「よみ人しらす」が欠落している現象については実は片桐洋一に論がある。片桐は『後撰集』の本性<sup>23</sup>などの論文中で後撰集は未定稿本もしくは未定稿本的であると述べ、その一理由として、私家集などとの歌の出入りから後撰集には「よみ人しらす」という表記がなかったと見られると述べた。西本願寺本『友則集』には『後撰集』から収録されたと考えられる十九首があり、奇妙なことにそのなかには非友則歌八首が含まれている。『後撰集』241番の友則歌が友則集に13番歌として出、その13番歌に『後撰集』242・243・245が14・15・16番歌として続く(天福本244番歌は二荒山本・片仮名本ではこの位置になる)。『後撰集』での友則歌が241番歌だけであるにも関わらず242・243・245が友則集に入っているのは後撰集242番歌に「よみ人しらす」が無かったためであるという。あるいは『後撰集』372番歌の友則歌が『友則集』18番歌として出ており、その18番歌に『後撰集』373・374番歌が19・20番歌として続く、これも後撰集373番歌に「よみ人しらす」がなかったためという。片桐は『宗干集』『興風集』『伊勢集』『躬恒集』『忠宍集』『小町集』『貫之集』『古今六帖』などにも同様の事例を指摘できるとして、後撰集に「よみ人しらす」の記載がなかった時期があったと推測している<sup>23</sup>。

そして杉谷寿郎は堀河本に「よみ人しらす」の欠落が多いことについて、片桐論を受けて堀河本が「原後撰集の形態を多分に残存させている系統本である」可能性に言及している<sup>24</sup>。

こうしてここまで欠落と言ってきたものが本当に欠落と呼ぶ

べきものが問題となる。片桐は私家集との関係から「よみ人しらす」が無い後撰集を想定し、無いことをもって未定稿もしくは未定稿的と言う、つまり世に出た後撰集にはもともと「よみ人しらす」が書かれていなかったと言っているのである。これまで見てきたように堀河本では大量に「よみ人しらす」が無いところがあるし、他の非定家本でも無いものが多い、書かれていたものが欠落したというより、書かれていなかったものがそのままの状態である可能性が生じるのである<sup>25</sup>。

#### 四

以上と関係すると思われる別の事象を見てみる。「後撰集」の本性<sup>26</sup>の中で後撰集の作者名表記について片桐洋一は次の指摘も行なった。卷十六雑二箇番歌は天福本では次のようになっている(括弧内の右傍線が例示した写本名である)。

人のめにかよひけるみつけられ侍て

賀朝法師

( 雲坊 A B天)

身なくとも人にしられし世中にしられぬ山をしるよしも哉

堀河本では次のようである。

賀朝法師人のめにかよひ侍てみつられて

(安堀 保 )

みなくとも人にしられし世のなかにしられぬ山をしるよしもかな

堀河本で詞書の中に出ている「賀朝法師」が、天福本では作者名部分に独立している。片桐は堀河本や承保三年本のように、

作者名が独立表記されない書式が後撰集の物語的な本性を表わしているとし、この形が古い形であるとする(詞書中にある独立表記されないこの形を、稿者は「作者名が未分化である表記」と称している)。「よみ人しらす」が無かった可能性やこうした例から、片桐は後撰集は未定稿本もしくは未定稿本であると述べた。のちの『後撰集』の伝本<sup>26</sup>で片桐はこうした本文のあり方について「原資料たる歌語りの打聞きそのままの姿」と述べ、『後撰集』が歌語りの打聞きを撰集資料としたために詞書の物語的要素が残存し、『後撰集』撰者や後代の書写者は、これを詞書の一部として残したり、作者名表記として扱ったりというように、いわば、とまどった本文の扱いを露呈しているのである」とも述べている。

片桐は次のような例も挙げている。卷三春下106番歌は天福本では次のようである。

すけのふか母身まかりてのちかの家に敦忠朝臣のまかりかよひけるに

さくらの花のちりけるおりにまかりて木のもとに侍ければ家の人のいひいたしける

よみ人しらす

(安 保A B天)

今よりは風にまかせむ桜花ちるこのもとに君とまりけり堀河本では次のようである。

助信のは、身まかりて後も時々かの家に敦忠朝臣まかりかよひけるに

さくらはなちりけるおりにまかりて木のもとに侍りければ

家人のいひいたしたる

(二片 堀雲坊)

いまよりは風にまかせむさくら花ちる木のもとに春とまりけり

前歌104番歌の作者は諸本「橘のきむひらか女」(二のみ作者名「つらゆき」の107番歌が前歌となつているが事情は同じである)であるので、「よみ人しらす」がある天福本の書き方が通常であるが、二荒山本・片仮名本・雲州本・伝坊門局本でも堀河本同様作者名表記部分が無い、よって誤脱ではなくもともと記されていないかたと見るのである。片桐は「家人の」を主語として、「よみ人しらす」の表記のない二荒山本、堀川本が本来の形を残すものであろう」という。詞書内の語が「家人」といった普通名詞で、作者名表記として独立させにくい場合には伝来途上で「よみ人しらす」が補記されたと見るのである。

本論文として、作者名表記部分に作者名に関わるものが書かれない事例として次に三首の詞書を挙げる。作者名表記部分について、未分化で無表記の本文から、「よみ人しらす」か普通名詞が書かれている本文へ、と本を並べてある。(傍線を付した本で代表させてそれぞれ一写本の本文を例示し、詞書内の作者名には二重傍線を付した)。

卷五秋上230番歌(諸本前歌229番歌の作者名「藤原かねみ」)

かれにけるおとこの七夕にまうてきたりければ女のよめりける

かれにける男、七月七日のよさりまできたりければ、女のよめる

読人不知 (雲 天)

かれにけるをとこの七日のよまうてきたりければ

よみひとしらす (二)片安 保A B ( )

卷三春下89番歌(諸本前歌88番歌の作者名「貫之」)

あれたりける家にすみける女つれくにおほえ侍ければ

庭にあるすみれのはなつみて

となりにいひつかはしける (二)堀 ( )

あれたる所にすみ侍ける女つれくにおもほえ侍ければ

庭にあるすみれの花をつみて

いひつかはしける よみ人しらす

( ) 片安 雲保坊A B天 ( )

卷八冬470番歌(この470番歌は、二堀雲坊Bでは460番歌作者名部分

分「よみ人しらす」、片安保A B天では461番歌作者名部分「(人

の)むすめのやつなりける」の文脈下にある。また坊は二と同意

であるが作者名「をんな」がない)

淳実親王しのひてまりかよふところ侍りければ

のちくかれくになり侍りにければ

いもうとの齋宮のみこのもとよりかの女のもとにこのころ

はいかそといへりければ

その返事に ( ) 堀雲坊保 A ( )

式部卿あつみのみこしのひてかよふ所侍けるを

のちくたえくになり侍りければ

いもうとの前齋宮のみこのもとよりこのころはいかにそと

ありければ

その返事にをんな ( ) 安 B天 ( )

るに

のちくたえくになりければ

いもうとの前齋宮のもよりひころはいかにそとありければ

は をんな (二)片 ( )

前二首230番歌・89番歌はともに前歌の作者名の文脈下にある

ため「よみ人しらす」が自然である。230番歌では無表記がもと

もとで詞書の「女のよめりける(女のよめる)」が外されて

「よみひとしらす」が書き付されるようになったと理解され

る。89番歌も同様の事態と見られるであろう。470番歌は作者名

の文脈が本によって異なるが、当該歌だけ見るとやはり詞書か

ら「かの女」「をんな」が外されて作者名表記部分の「をんな」

となつたと推される。いずれも作者名が表記されていない状態

から、「よみ人しらす」や「女」が作者名表記部分に書き付さ

れるようになったと理解できる。本節冒頭の166番歌のように作

者名が詞書内から作者名表記部分に独立する・105番歌・89番

歌・230番歌のように詞書内の普通名詞が「よみ人しらす」とし

て作者名表記部分に記される・470番歌のように詞書内の普通名

詞「女」が作者名表記部分にそのまま「をんな」として出てく

る、これらはすべて同様な事象と理解されるのである。

そして、結局、片桐洋一が別の事象として扱っていたこと、

すなわち前節を見た、私家集との出入りから知られる「よみ人

しらす」の表記が無かつたという事象・本節を見た、歌によつ

て作者名が未分化の詞書を持つ本があるという事象、いずれも

が実は同一事態すなわち作者名表記部分があつたらしいという一点に

まとめあげることができるのである。<sup>(27)</sup>

作者名表記部分が無表記であったとすると事態が理解しやすくなる三事例を追加して示しておきたい。

卷十卷末に697・698・699の三首からなる贈答歌がある。698・699の歌作者に関する表記が混乱をしている。697歌の作者は微差はあるが「源庶明・朝臣」<sup>もろあき</sup>として作者名表記部分にあるが、698番歌は「(ナシ)」「(二安堀雲坊天)・「よみ人しらす」(保A B)、699番歌は「(ナシ)」「(堀保A B天)・「をとこ」(二坊)・「をとこ返し」(安)・「読人不知」(雲)となっていて、三首の作者は順に、二・安・坊と保・A・Bでは「庶明」「女」「庶明」、雲では「庶明」「庶明」「女」であると理解される。堀・天では698・699とも作者名部分は空白であり、作者は直ちには不明である。現在の注釈書(新大系・叢書。底本は天福本)は「庶明」「庶明」「女」と理解している(いづれにしても記された歌作者が混乱していることは尋常ではなく、その表記の混乱は編纂時のものと見えない)。698・699の作者名部分が空白である堀河本・天福本のあり方が本来で、こうした混乱は伝来途上において作者名部分が補われたために生じたと解される。

卷十六雑二にある117・118の贈答歌では、その作者名表記部分は117番歌は「(ナシ)」「(堀)・「贈太政大臣」(雲)・「宣旨」(天)・「よみ人しらす」(坊保A B)、118番歌は「(ナシ)」「(雲)・「太政大臣」(堀保)「贈太政大臣」(坊A B天)となっていて、雲以外の諸本は贈歌作者「前中宮宣旨」・答歌作者「贈太政大臣」として、雲州本のみが贈歌「贈太政大臣」・答歌「前中宮宣旨」の作者理解である。記された歌作者が混乱している

ことは同様であり、なかでも詞書に「前中宮宣旨」と記載がある人物を「よみ人しらす」と記するのは奇妙であり、やはりその表記の混乱は編纂時のものと見えない。<sup>(28)</sup>この混乱も二首の作者名表記部分がもとは空白であったためと解される。

卷三春下にある四首137・138・139・140は、藤原雅正が送った二首137・138に、紀貫之が二首139・140を返歌した贈答である。したがって堀・雲・保・坊・A・B・天では138と140の二首には詞書も作者名もない(二では138・139・140、安では138・139が欠落)のだが、片仮名本では138・140ともに「題読人不知」が記されている。伝来途上において、空白箇所には「題知らず」や「よみ人しらす」を補入して本文を整えるという認識が先行して歌内容をよく吟味せずに「題読人不知」が書き入れられた事例と見える。

## 五

もと世に出た後撰集の本文は、作者名表記部分が多く箇所が無表記であり、「題しらす」も多くの箇所が無表記であったと見られる。とすると作歌事情(詞書)・作者名がともに知られないさい、後撰集諸本が「題しらす よみ人しらす(人しらす)」「題よみ人しらす」「題しらす よみ人も」と多様な書式を持っていることは、無表記であったところに、伝来途上の書写者たちが恣意的に補ったゆえに生じたとも見られ、欠落と見えるところはもとの無表記そのままであると見られるのである。

こうしたことからすると、後撰集はもともと作歌事情が記さ

れた有題の詞書のみを持つ歌が多く載る歌集であったことなる。編纂未了であったため、すなわら世に出たのが未定稿本であったため、とするのがこれまでなされてきた後撰集への見解からは穏当となるであろう。が、事は単純ではなさそうである。四節で卷十六雑二168・卷三春下105・卷五秋上230・卷三春下89・卷八冬470に見られる未分化の詞書を例として挙げた。片桐はこうした詞書について「原資料たる歌語りの打聞きそのままの姿」であるために未分化の状態を残していると述べる。が、これらの詞書には丁寧語「はべり」「まうでく」が使われている。原資料のままであると使われないはずの丁寧語が用いられ、帝に対して奏上する体裁をとっている。後撰集の「はべり」の使用は堀468例・雲495例・坊448例・保481例・天512例であり、その使用が大変に多いということが実は大きな特徴である。<sup>③</sup> こうした丁寧語「はべり」「まうでく」の使用は原資料ま

まといった未定稿説からは説明がつかない。<sup>④</sup> 編者たちの手を離れたときから「はべり」叙述になつていたとすると、本論で見てきた現存諸本の持つ徴証からは後撰集の現存諸本について次の二つの解釈ができるであろう、一つは、古今集に倣って「詞書＋作者名表記」の体裁を目指していた――撰集資料をもとに作者名を含んだかたちで作歌事情を記した部分を「はべり」叙述の奏上体裁で整えるところに至り、つぎにその部分から作者名を外して「詞書＋作者名表記」の形に書き改める作業を進めていた、その進行途中での未定稿のものが世に出た――もう一つは、古今集の「詞書＋作者名表記」に見倣おうとしていなかった――作者名を含んで作歌事情を記す「万葉

集」題詞に相当するような書き方をするのが編者の撰集の完成形であつて、その体裁をなしたものが世に出たのだが、後世の伝来途上の書写者がその書き方を不審として古今集に倣う書き方に訂正しようとしながらもその訂正が未完結のものが伝来している――この二解釈である。いずれも本論の徴証だけからは大胆に過ぎるであろうし、歌序・歌数の問題もあるのだが、こうした状況を想定しないと理解しかねるのが現存する後撰集諸本の様相なのである。

## 注

(1) 全巻揃う現存諸本中、例えば堀河本と天福本とを比べると、歌数は堀河本100首・天福本100首であつて、内実として堀河本にあつて天福本にない歌10首・堀河本になく天福本にある歌18首であり、歌序位置は十七箇所が相違する。あるいは雲州本と天福本とを比べてみると、歌数は雲州本100首・天福本100首であつて、内実として雲州本にあつて天福本にない歌19首・雲州本になく天福本にある歌7首であり、歌序位置十四箇所が相違する。二例を見てもその乱れ方が尋常でないことが知られる。歌数・歌序については杉谷寿郎『後撰和歌集諸本の研究』1971笠間書院、「諸本歌序対照表」『後撰和歌集』1988笠間書院に詳しい。

(2) 詳しくは以下のとおりである。杉谷寿郎『後撰和歌集前後』青簡社2016の整理による(注1の「後撰和歌集諸本の研究」の系統整理に、後に出現した伝坊門局本が加えられている)。  
一、汎清輔本系統  
(一) 二荒山本  
(二) 清輔本 (1)片仮名本 (2)伝慈円本 (3)承安三年本

### 二、古本系統

- (一) 白川切 (2)角倉切・木曾切 (3)堀河本
- (二) 胡粉地切
- (三) 行成本



- (四) (1)鳥丸切 (2)慶長本 (3)雲州本  
 (五) 伝坊門局筆本

三、承保三年奥書本系統 (一) 承保三年本  
 四、定家本系統

(一) ④無年号本A類本 ⑤無年号B類本  
 年号本(承久本・貞応本・天福本など)  
 以下を使用した。○内が本論で使用する略号である。

二荒山本(二) ……小松茂美『日本名跡叢刊二荒山本後撰和歌集上』二玄社 1980  
 片仮名本(片) ……山田孝雄『後撰和歌集』古典保存会 1982.33(国立国会図書館デジタルコレクション内)の複製を使用)

承安三年本(安) ……鳥取県立図書館蔵『後撰和歌集』  
 伝慈円本(慈) ……杉谷寿郎『後撰和歌集諸本の研究』資料編  
 白川切(白) ……小松茂美『後撰和歌集 校本と研究』1961 誠信書房

堀河本(堀) ……書陵部蔵 堀河本八代集内マイクロ/デジタル目録D B [100061314 八代集] 国文研究資料館  
 雲州本(雲) ……久曾神昇・深谷礼子『後撰和歌集(雲州本)と研究』未刊国文資料刊行会 1968(ただし実見によってその本文を訂して使用する(福田孝「雲州本『後撰和歌集』について」『汲古』第69号) 2016.6)

伝坊門局本(坊) ……片桐洋一『後撰和歌集 伝坊門局本』和泉書院 2009  
 承保三年本(保) ……『後撰和歌集別本 詞花和歌集』天理図書館 善本叢書 69 1984

無年号本A類(A) ……『中院本後撰和歌集』大阪女子大学国文学研究室『後撰和歌集総索引』大阪女子大学 1965(京都大学属図書館貴重資料画像で画像が見られる)。  
 無年号本B類(B) ……日本大学蔵『正平本後撰和歌集』(ノートルダム清心女子大学古典叢書刊行会『後撰和

歌集』1969による)  
 天福本(天) ……冷泉家時雨亭叢書 第三卷『後撰和歌集 天福二年本』朝日新聞出版 2004

(3) 杉谷寿郎『後撰和歌集諸本の研究』福田孝・堀河本『後撰和歌集』こつこつ『武蔵野大学日本文学研究所紀要』第二号 2015.3  
 (4) 福田孝「承保三年奥書本『後撰和歌集』について」『和歌文学研究』二〇一〇号 2010.12、「はぐり」から見た後撰集諸本間の距離」『武蔵野大学日本文学研究所紀要』第三号 2016.3  
 (5) 撰集故実、藤岡忠美「袋草子新日本古典文学大系 29」岩波書店 1995

(6) 冷泉家時雨亭文庫編『古来風鉢抄』冷泉家時雨亭叢書 第一卷 1982 朝日新聞出版(稿者が漢字仮名交じり文にした)

(7) この説は実際に古今集が「題しらす よみ人しらす」、拾遺抄が「題よみ人しらす」となっているところからは首肯されるものである。

(8) 無年号B類本を集成したノートルダム清心女子大学古典叢書刊行会『後撰和歌集』には同大学蔵の伝月樵筆本を底本にして七本が対校されている。底本のみ「題しらす よみ人しらす」で揃い、対校七本すべては「題しらす よみ人も」で揃っている。対校七本が無年号B類の本来の書式と判断した。他の箇所からしても、底本ではあるものの伝月樵筆本は良い本文を有していると思える。

(9) 岸上慎二『後撰和歌集の研究』資料・1968 新生生社  
 (10) 岸上慎二「嘉禎二年定家本『後撰和歌集の研究』と資料」・杉谷寿郎「定家嘉禎二年書写本考」『後撰和歌集前後』による。

(11) 具体的には 351・354・388・397・443・456・460・462・475 に「よみ人も」の異本注記、435・462 「題不知 よみ人不知」の注記(462には「或本無説人不知字」の注記もある)、354・460 「題不知或」、424 「タイシラス ヨミヒトモ或」、以上である。383・428の二首には注記がない。

(12) 注1の杉谷寿郎『後撰和歌集諸本の研究』

(13) 久曾神昇「袋草子及び同遺漏に就いて」『国語と国文学』13巻9号 1986.9、樋口芳麻呂「袋草子・無名草子の成立時期について」付、藤原範永の没年」『国語と国文学』47巻4号 1970.4  
 (14) 杉谷「後撰和歌集諸本の研究」p.239に厳密ではないが、同様な指摘がなされている。

(15) 雲州本や伝坊門局本にある例外は書き揃えが十全には行なわれなかつ



たためと見られる。

(16) 『古来風抄』の「後白川院の…みな「古今」の同じ事に書き奉り

はべりにしなり」からは伝来途上で生じたと推測される乱れた本文に

(17) 白川切には他本に見えない「人しらす」という言い方が使われてい

る、287・326・431・452・462・480・512・579・608・621・443。

(18) あえて言えば、片仮名本では巻の初出で「題しらす よみ人しらす」

が使われ、巻途中で「題よみ人しらす」が使われる―巻二・巻四・巻

五・巻七・巻八―傾向がある(このこと、杉谷「後撰和歌集諸本の研

究」で同様な指摘がすでになされている)。しかし巻初出部分で必ず

(19) 福田「後撰集 定家本の位置についての小論」(武蔵野大学日本文学研

究所紀要第7号) 2019に述べたように、定家本は丁寧に補訂され

た本である。定家本後撰集のような本を目にしていたならば、清輔は

(20) 「しどけなし」とは言っていないかと思われる。柳田健一「後撰和

歌集」の親疎関係―巻一―巻十を対象とした諸本分類を中心とし

(21) て「一語国文研究」131・132号2007:3・5で最も末流に位置づけ

られている。

二荒山本で「題よみ人しらす」がどのように揃ったのかについては別

の理解の仕方もあり得る。注25参照。

伝公任筆本で当該箇所が欠脱していた可能性もあるいはするが、例

えば天福本では朱の書き入れ「しらす」が74番歌と120番歌にある、そ

の両歌間の76・83・99・104・105・110・119番歌には別の朱の書き入れ

が存し、84・97番歌には朱の書き入れ「しらす」がない、といったこと

もあり、その可能性は低い。この84・97番歌にはやはり何らかの理由

で朱の書き入れを施せなかったとみるべきであろう。十三箇所に書き

入れがないことについては杉谷も「この表記にこだわった定家として

は徹底していないというべきであるが」(注10の論)と不審を述べて

いる。

(22) 片桐洋一「後撰集」の本性」(「国語国文」第二五巻五号1965:3・

「後撰集」の伝本」(のち「古今和歌集以後」2000笠間書院に所収)

(23) 片桐は「友則集」「宗干集」「興風集」「古今六帖」については歌番号

等を示して具体的に後撰集との関係に言及するが、「伊勢集」「躬恒

集」「忠岑集」「小町集」「貫之集」には「伊勢集」は「後撰集」とは直接

的な歌の出入りがないこと(関根慶子「中古私家集の研究」(風間書房

1967)が検証されていて全面的に首肯できるわけではないが、片桐

説が確認できる事例があることも事実である。片桐が挙げている他の

例を後撰歌番号で示すと「友則集」382・383、「宗干集」299・300、379・

380、325・1330「興風集」273・274・275・276、稿者の確認例は「躬恒集」

344・345・346・347、365・366、「忠岑集」387・388・389・390である。また、

奥村恒哉は「古今六帖と後撰集との問題」(「国語国文」三五巻一〇号

1966:10)のち「古今集・後撰集の諸問題」(1971風間書房に所収)で

「古今六帖」に関して指摘された歌において諸写本内に「よみ人しら

す」の欠落例を確認して片桐論の追認を行なっている。

(24) 杉谷は二荒山本の欠落箇所について誤脱説を取り(先に見たとおり単

純に誤脱とは見られない)、同様に堀河本についても「現存堀河本の

運筆の速いことによる不意な本文書写」による誤脱と最終的には結

論づける。しかし孤例はすべて巻一から巻十四の堀河本の本来本文部

分にしか無いところを見るとこれらは単純な誤脱ではなさそうである。堀河本には親本本文の校正二五四箇所、異本書き入れ五二六箇所がある。書写者には校正時・異本書入時の最低二回の訂正機会があったにも関わらず巻一から巻十四までの「よみ人しらす」欠落箇所はま

ないことを示唆しよう。

- (25) この考え方をしても、二荒山本の「題よみ人しらす」が一括して揃えられたという先の言及に支障は生じない。同一時に「題よみ人しらす」や「題しらす」が補われたか、「題しらす」や「よみ人しらす」が所々に補われていって混在状態となり或同一時に「題よみ人しらす」に書き換えられ一部に「題しらす」の記載があることになったか、になるからである。

- (26) 詞書と作者名表記を別立てにする他勅撰集の定律に見倣うと、別立てになっている作者名表記をわざわざ詞書内に戻して詞書の一部とすることは考えにくい。

- (27) 後撰集の本文研究の困難は、こうした事例を見ても分かるが、系統ごとに同じような本文傾向を示さない点にある。また、本節での事例において常に作者名表記部分が無表記のグループに属するのは堀河本だけである。こうしたところからも堀河本に「よみ人しらす」の無表記が多いことが単純に誤脱と言えないことが理解される。そして稿者はかつて未分化の詞書を多く持つところから堀河本の本来本文部分(巻一〜巻十四)と承保三年本の本来本文部分(巻十四以降)について他本より古態を残している可能性が高いことを指摘している(「後撰集 定家本の位置についての小論」注19)。

- (28) 片桐洋一『後撰和歌集 新日本古典文学大系6』岩波書店1990、工藤重矩『後撰和歌集 和泉古典叢書3』和泉書院1993。稿者にも「庶明」「庶明」「一女」と思われる。とすると、ひとり雲のみが解釈が合っていることになる。

- (29) 稿者も雲以外の諸本の理解でよいと思われる。とすると、こちらはひとり雲のみが解釈を誤っていることになる。

- (30) 田所寛行『後撰和歌集詞書に見る対象尊敬と聞手尊敬』「茨城キリスト教大学紀要(人文科学)」32巻1998.12

- (31) 福田「はべり」から見た後撰集諸本間の距離。天福本における「はべり」の使用が一番多い。丁寧な言い方を行き渡らせるためだとすると、これは定家本が整った本文の様相を持つことに矛盾しない。

- (32) 同様の指摘はすでに重見一行『後撰和歌集詞書における「侍り」多用に関する試論「国語と国文学」56巻10号1979.10』なされている。

(ふくだ たかし 武蔵野大学)